蝶の行方

谷口　あさこ

初めて見た彼女はアオスジアゲハのようだった。発色のよい濃い青地のブラウスには黄色と黒の小さな三角模様がランダムに散っている。膝上丈の台形スカートはきれいな黄色。そこからすらりと伸びる脚の先には青いくるぶし丈ソックスと黒革のレースアップシューズ。

昆虫のようにきわだった色の組み合わせを自分の物として着こなしている。

朝のラッシュアワー。駅のホームの女性専用車両の乗車位置には、ベージュのコート、黒いニット、グレーのカーディガン、紺色のブレザーが行儀よく並んでいる。控えめな色合いの女性たちの中で、青と黄色をまとった彼女は何か違う生き物のような気がした。

私は三メートルほど離れた隣の乗車位置に並ぶ彼女の顔を盗み見る。

二十代後半だろうか。メイクも薄く、目鼻立ちも薄い。ショートのカーリーヘアは地毛のままなのか黒かった。あらわになった耳に黒い蝶と青い蝶のピアスがぶら下がっている。晩春の淡くかすんだ青空から降り注ぐ柔らかい日差しを受けて、青色のサテン生地が煌めく。アゲハチョウが舞っているかのようにも、カナブンの翅がつややかに光っているかのようにも見えて、私はそこから目が離せなかった。

それから、早番の日の朝と遅番の日の帰宅時に最寄り駅のホームで彼女をよく見かけるようになった。一度彼女の姿が焼き付いてしまった私の目は自動センサーを搭載したかのように彼女の色彩に反応してしまう。

赤と黒のスジグロボタル。緑と赤のニシキキンカメムシ。青と赤のナミハンミョウ。

服自体はブラウスやニットセーターに膝丈スカートとシンプルな組み合わせなのに、色合いは派手な昆虫のよう。私は自分の眼鏡の太いフレームで半ば視線を隠すようにしながら盗み見て、その色彩を楽しんだ。そして、密かに彼女のことをアゲハと名付けた。

今朝も黄色のニットセーターに白地に黒い丸の模様が描かれたスカートを身に着け、緑と黒のボーダーのクルーソックスにオレンジ色の靴を履いていた。キイロテントウムシだ。緑色のリュックが葉っぱのように見え、ことさら葉陰に身を寄せるテントウムシに見える。

なんて素敵なのだろう。私はホームの女性専用車両の乗車位置に立ちながら、隣の乗車位置に並ぶ彼女の背中をうっとりと観察する。

電車が到着し、私と彼女はそれぞれ違う乗降口から乗り込む。車両内は通路にも人が立っていて、私は自分の立ち位置を確保した後、彼女が乗り込んだであろう右側の乗降口付近へ視線をやったが鮮やかな黄色は見えなかった。

五分ほどで隣の駅に到着し、そこで電車を降りる。都心に向かう電車のため、乗車する人は多いものの下車する人は少なかった。下車した人の中に彼女の姿がないのはいつものことだ。ホームから窓越しに車両の中を探すが、あの黄色を見つけることができない。ホームからゆっくりと電車が動き出すのと同時に私も改札に向かって歩き出した。

小さな駅舎を出ると、駅前ロータリーには車も少なくがらんとしている。喫茶店や本屋やケーキ屋など数軒の商店を通り過ぎると、のどかな住宅地となった。道路沿いに長い垣根に囲まれた古い家が建ち並ぶ。その合間の狭い敷地に新しい家が建ち、小さな畑も点在する。平坦だった道路は緩やかな坂道となり小高い丘の途中にある小学校へとつながっている。

小学校の校門は登校時刻が過ぎたため閉まっている。脇の小さな門扉から入り校庭へと向かう。一時間目が始まっているのでグラウ

ンドで遊んでいる子たちはいなかった。十月の乾いた日差しを受けた土の上を歩く。ザクザクと足裏に響く感触が心地よい。

校庭の奥にある二階建てのプレハブが私の職場だ。私はカバンから鍵を取り出すと、『学童保育ノビッコ』と書かれたガラス扉の鍵穴に差し込み開錠する。玄関の三和土で靴を脱いで上靴に履き替えた。教室へと続く廊下は静かだ。宙に舞う塵が窓から差す日差しを受けきらめく。手前の第一教室の引き戸を開け、指導員用の荷物置き場にカバンを置くと事務デスク上の電話を見る。留守電ボタンが赤く点滅しているので、すかさずボタンを押した。

『一年高山恭太朗（たかやまきょうたろう）の母です。恭太朗に熱があるので学校を休むんですが、午後からどうしても会社に行かないといけないので預かってもらえますか』

私はため息をつく。欠席連絡かと思いきや熱のある子を預けたいだなんて困った親だ。

名簿を取り出して、母親の携帯番号を確認してから折り返しの電話をすると、すぐにつながった。

「私、ノビッコの福田です。恭太朗君のお母さんでしょうか」

『すみません。恭太朗、熱はあるんだけど元気なんです。今もテレビ見て騒いでるの。聞こえるでしょ？　学校で勉強するのは無理だけど、ノビッコではのんびり過ごすことはできるので、放課後だけでも預かってくれない？　どうしても会社に行かないといけないのよ。今日、お客さんが会いに来るの。私、はずせないのよ。困ってるんです。お願いします』

怒涛の勢いでしゃべる母親が一息ついたところで私は口を挟む。

「高山さん、学校を休む時は学童保育も休むように決められています。恭太朗君、今は元気かもしれませんが、これから熱があがってしんどくなるかもしれませんよね。病気の看病はこちらでは出来かねます」

『そんな固いこと言わないで、どうかお願いします。他に見てもらう人がいなくて本当に困ってるんです。お願いしますよ』

先方の懇願に同情心は湧かない。私には子供がいない。でも、もし、小さい海里（かいり）が病気で苦しんでいたら、私は絶対に彼のそばを離れない。

「高山さん、規則で決まってるので、熱がある子供をこちらで預かることはできません。申し訳ありませんがご了承ください」

『そこをどうか』

「何度言われても預かることはできません。本当に申し訳ないのですが、」

『もういいわよ！』

プツンと通話が切れた。ツーツーと空しい音が耳に響く。私は深くため息をつくと受話器を置いた。

壁際に並ぶランドセル棚に目を向ける。腰丈の棚の上には透明な飼育ケースが置いてある。そちらへ足を進めて中をのぞき込む。

ケースの中には緑色のパセリが茂り、葉の上に黄緑色と黒の縞模様のキアゲハの幼虫がいる。長さは三センチぐらい。もそもそとパセリの葉を食べ、元気そうだ。この調子だと最後の脱皮もすぐだろう。ケースの蓋をあけて苗パックに入っているパセリの株を取り出し、ケースの底に散らかるフンを掃除する。パセリの葉に乗ったままの幼虫はケースから出されたことなど気にせず葉を食べ続けている。私はそっとその幼虫の頭を指先で押す。幼虫は怒って頭から黄色い二本のツノを出す。その様子がかわいくてフフッと笑みが出た。幼虫は警戒したのか動きを止めたが、しばらくするとまた何事もなかったかのように葉を食べ始めた。

虫はしゃべらないところがいい。言葉の代わりに与えられたかのような個性的な色合いが好きだ。黄緑色と黒の縞々、黒の縞の上に

赤い点が並ぶ。体全体で自分は有害だと虚勢を張っている。そのくせ、私の存在など意に関せずむしゃむしゃと葉を食べる姿は呑気で心が和んだ。食欲旺盛なのも見ていて気持ちが良い。そろそろ新しいパセリの株を持ってこないといけない。

私は幼虫の乗ったパセリを丁寧にケースに戻し蓋を閉めた。深呼吸をして気持ちを切り替えると、電話や書類が並ぶ事務デスクに戻った。

この日は早番だったので退勤時間も早い。午後五時に下校する子供たちと一緒にノビッコを出る。

私が勤務する学童保育ノビッコは、両親が共働きなどで放課後自宅に大人がいない児童を預かっている。児童数は八十名。市内の学童保育の中では大きい方だ。授業が終わって小学校から直接やって来た子供たちはまず宿題をした後、おやつを食べたり、遊んだりと自由に過ごす。午後五時になると希望者だけが集団下校する。残った子供たちは午後七時までにそれぞれの親が迎えに来るのをノビッコで待つことになる。

夕日を背中に受けて、駅方面に向かう子供たちと一緒に歩く。この時間に帰るメンバーはだいたい決まっていて、今日は恭太朗が休みなので一緒に帰る子供たちは五人だ。

「福田さん、聞いて」

二年生の岡本菜波（おかもとななみ）が最後尾の私に声をかけてきた。

「今日、ママがケーキ買ってきてくれてるんだ」

「それは楽しみだね、どんなケーキかな」

「あたしが好きなイチゴがいっぱい乗ってるケーキ。ピアノの発表会でいっぱい頑張ったから」

「昨日、発表会だったんだっけ」

「うん」

「人前で弾けるのってスゴイね」

私の褒め言葉に彼女はおかっぱ頭を揺らし嬉しそうに微笑んだ。

「おれはサッカーの試合だった。ゴール入れた」「私は水族館に行った」「家でゲームしてたー」

子供たちが次から次へと自分のことをしゃべり始める。私はそれぞれに軽く答えてから、乱れた隊列を直し、前を向いて歩くように声をかける。

十月になり、だんだんと日没が早くなった。太陽は遠くの山裾に沈もうとしている。道路沿いに建つ住宅が影を落とす。もうじき住宅地は薄闇に包まれようとしていた。

駅にたどり着く前に一人、また一人と家に最寄りの道角で別れていく。駅まで一緒にたどり着いたのは菜波だけだった。

「気を付けてね」

私は駅の入り口で彼女と別れる。彼女の家は線路に沿って五分ほどの所にあった。菜波は手を振るとまっすぐの道を歩いていく。私はしばらく彼女のラベンダー色のランドセルを見送ってから駅舎に入った。

帰宅ラッシュには少し早い時間のため帰りの電車はさほど混んではいない。扉のそばに立った私は次の駅で下車する。下車したホームで辺りを見回すがアゲハの姿はない。今まで早番の帰りに見かけたことは一度もないが、このホームで彼女の姿を探すのが癖になっていた。

家に帰ると、母が台所で忙しそうに立ち回っている。

「真美（まみ）、帰って早々悪いんだけど、手伝ってくれない。急に海里がご飯食べに来るって」

「留美（るみ）は残業？」

海里は、私の妹、留美の子供で、私にとっての甥になる。妹の仕事の帰りが遅い時は、

この家で夕食を食べることがよくあった。
私は手を洗うと母の隣に立つ。今日の夕食は焼き鮭とサツマイモの甘煮とヒジキの煮物と大根とネギの味噌汁だった。育ち盛りの高校一年生の男子には物足りないメニューだろう。
「豚肉の薄切りがある」
母は冷蔵庫をのぞき込み、お肉のパックを取り出す。私も一緒にのぞき、スライスチーズと梅干しを取り出す。
「チーズと梅シソを挟んでトンカツにしよう。シソ取ってくる」
私が言うと、母は心得たとばかりにパックから肉を取り出し、まな板の上に乗せ始める。
私は勝手口からサンダルを履いて庭に出る。家の裏手の庭にはささやかな家庭菜園があり、退職した父の楽しみの一つになっている。辺りはすっかり日も沈み、薄暗いものの、泥棒除けの人感センサーライトのおかげで、庭の様子は分かった。
私は花帆が伸びてきたシソの株から虫に食われていなそうな葉を数枚取る。そして、隣の畝に群生しているパセリを見る。優しく手を入れ、葉の隙間をのぞき込むと、葉陰に隠れるようにして身をひそめる黄緑色と黒の縞のキアゲハの幼虫の姿を見つけた。四匹ほどいるのを確認してから、よかったと安心する。
自然にいる幼虫たちはいつの間にかいなくなってしまう。さなぎになるために巣立っていったのか、鳥に食べられてしまったのか、分からない。どちらにしても予兆もなくいなくなってしまう幼虫たちは私の心に一抹の不安を与えた。以前に、パセリの株すべてを防虫ネットで覆うことも考えたが、それだと新たに卵を産みにやってきた蝶たちが気の毒だ。私はどの蝶たちに対しても開かれた楽園を作ってあげたい。
ついでに、パセリの葉を一房摘むと私は急いで家に入った。
一人増えた食卓はいつもより明るい気がする。
「海里、勉強はちゃんとやってるか。部活ばっかりしてたら駄目だぞ」
「海里、ご飯のおかわりは？　トンカツもいっぱい食べてよ。海里のために作ったんだから」
父も母もたった一人の孫を大事にし、気にかけている。四十を過ぎた私と妹に対して、これから子供が生まれることを期待していない。だから、ただ一人自分たちの血を継ぐ彼にいろんなモノが注がれるのだ。
海里は彼らの言葉に対して適当に返事をしながら、ゆっくりご飯を食べている。私は箸を宙に浮かせたまま、正面に座る彼の姿をまじまじと見る。浅黒く日焼けした肌に吊り上がった目尻、狭い鼻翼、おちょぼ口を精一杯開けてトンカツをかじる顔は五歳の頃とあまり変わらないような気がした。
「今日は何キロ走ってきたの？」
「千メートルのインターバル走五本」
私の問いに海里は淡々と答える。
「すごいなぁ。海里がそんなに走れるなんて思いもしなかった。保育園のかけっこではビリだったのに」
「でも、皆からの声援を受けて一生懸命走ってる姿におばあちゃんは感動したわ」
「いつの話だよ」
海里は面白くなさげな声をあげると、トンカツの横に添えられたパセリをつまみあげる。
「真美ちゃん、このパセリちゃんと見た？　卵ついてない？」
「きれいに洗ったよ。自分で確認したら」
私の言葉を聞いて、海里はパセリを目の高さにかざしてしげしげと見る。小さい時に畑のパセリにキアゲハが卵を産みに来るのを見てから、確認せずにはいられなくなったようだ。それが、彼の優しさから来ているのか、潔癖性から来ているのか、私には分からない。海里は葉と葉の隙間や細い茎の表面を見分し終わった後、ぱくりと口の中に入れた。

私は昨年度まで隣の小学校の学童保育で勤務していた。学童保育を司る市の青少年育成課から辞令を受けて今年の四月からこの小学校の学童保育ノビッコに異動してきた。ここには私を含めて正式な指導員が三名いる。ほかに三、四名の補助員が日替わりで来るが、八十名の子供の指導や管理は私達三名がメインで行っていた。平日の早番遅番もこの三名で回している。

早番の朝、ホームのいつも並ぶ女性専用車両の乗車位置にアゲハはいた。私はその斜め後ろにそっと並ぶ。四月に私がこの路線を使うようになってから、決まった時間に彼女を見かけるので、彼女は定時出社のＯＬなのだろう。職場にこの奇抜な色の服は溶け込めるのだろうか。それとも会社では制服に着替えるのだろうか。

斜め前に立つ彼女は私よりも十センチほど背が低い。顔を正面に向けたまま流し目で彼女の衣装を盗み見る。黒と赤の縦縞のブラウス、緑色の膝丈のタイトスカート、オレンジ色のクルーソックスに黒いレースアップシューズ。今日はスジグロボタルの色合わせだ。紺色のリュックが夜の闇のように見える。

私は頭を下げて自分の服を見下ろす。紺色のフーディに紺色のジーンズ、グレーのスニーカー。ジーンズとスニーカーは私の制服みたいなものだ。茶色の太フレームの眼鏡も必需品。冴えないけれど実用的で気に入っている。私はこれでいい。

頭を上げると、また眼鏡越しに見下ろして彼女の服の色彩を楽しんだ。

電車がホームに停車し私たちは同じ扉から乗り込んだ。彼女は車両の中の方に進んでいく。私は比較的扉に近いところで立ち止まり吊革につかまった。

「きゃぁ」

電車が発車してしばらく経った頃、車両の中ほどで女性の声があがった。そちらのほうに顔を向けると、一人の女性がアゲハの腰の辺りを指差している。アゲハはその辺りに目を向けると身じろぎもせず、そこを見つめている。声も聞こえない。

周りから「え、何？」「カマキリ？」と声が聞こえてくる。目を凝らすと、確かにアゲハのスカートに何かがくっついているようだ。アゲハはまったく動く気配がない。周りの人もどうしたらいいのか分からず、何もせずにそれを眺めている。

私は意を決して彼女のそばへ行く。彼女は吊革につかまって立ったまま。顔色は青ざめ、小さい声で何か言っている。聞き耳を立てると「いやだ、いやだ」と震える声で呟いていた。目線の先をたどると、長さ十センチほどの緑色のオオカマキリが緑色のスカートに同化するように止まっていた。私はおもむろに彼女のスカートへ手を伸ばす。そして、オオカマキリの胸をつかむと優しく持ち上げる。カマキリの脚の細かい毛が服の繊維に引っ掛かり、なかなか取れない。カマキリは怒ったように鎌を持ちあげた。私は鎌に指を挟まれないようしっかりと脚元をつまむと、服から引きはがした。

周りから小さな歓声があがる。アゲハの横にいた女性が「すごい、すごい」と褒めてくれる。

「あ、ありがとうございます」

固まっていたアゲハもやっと人心地ついたのか、頭を下げる。そして、私の指に挟まれて尾を振って暴れるオオカマキリへ怖々と目を向ける。

「すみません。大丈夫ですか」

彼女の怯えながらもこちらを心配してくれている声に私は軽くうなずく。

「慣れているから大丈夫よ。気にしないで」

電車は次第に減速する。「すみません。すみません」と謝り続ける彼女に、私は「本当に気にしないで」とお礼を制すると、オオカマ

キリを掴んだまま扉の方へ向かう。タイミングよく停車し開いた扉からホームに出た。窓越しに彼女と目が合うと彼女は深々とお辞儀をする。そんな彼女の姿をほほえましく思いながら私もペコリと頭を下げた。

電車が発車するのを見送りながら、足取り軽くホームの後方へ歩く。人がいないホームの最後尾にしゃがむと、オオカマキリをコンクリートの床に放した。観念しておとなしくしていたオオカマキリはその場に止まったまま動かない。

アゲハはいつからスカートにカマキリをくっつけていたのだろう。彼女の服をあれほど見ていたのに気が付かなかった。本当にカマキリと同じきれいな緑色だったもの……。

軽く息を漏らして笑うと、オオカマキリは我に返ったのか早足でホームの縁へと歩きジャンプしていった。

ノビッコにたどり着き、キアゲハの飼育ケースを見てちょっとした異変に気が付いた。ケースの下にフンとは違う黒に赤の入り混じったカスが落ちている。それは幼虫が脱ぎ落した皮だった。四回目の脱皮を迎え、今は幼虫の最終形態となった。あと、一週間ぐらいでさなぎになる。

私はケースの中の幼虫の様子をじっと見る。脱皮する前より黄緑色の部分がより鮮やかになり、黒色の部分とのコントラストが際立ち、赤い点もよりはっきりした。虫が嫌いな人が見た途端、嫌悪感を露わにするだろういかにも芋虫然とした姿。そのきわだった色合いが私の心を惹く。なんて神秘的なんだろう。

幼虫は脱皮して疲れたのだろうか。パセリの茎に止まったまま動かない。私は幼虫に触れないようにフンだけを掃除し、皮は子供たちに見せるためそのまま置いておくことにした。

授業を終えてノビッコにやって来た子供たちにキアゲハの幼虫が脱皮したことを告げると、ほとんどの子はフーンと興味のない返事をして、宿題の準備を始める。数人だけがキアゲハのケースを覗き込んだ。

「ちょっと大きくなったかも」

そう言いながら、恭太朗が幼虫の頭を指で押す。幼虫は怒ったように頭から黄色いツノを出す。

「怒った、怒った」

彼はツノにあえて触ると、その指のにおいをかぐ。

「くさーい」

笑いながら、私の方に指を差し出す。私は彼の指先に鼻を近づける。湿った汗のにおい、鉛筆のにおい、給食のにおい、それらに交じって薄っすらと立ち上がる幼虫のにおい。幼い時の海里を思い出し愛しさがあふれる。

「ふふ、くさいね」

笑いながら言うと恭太朗は勝ち誇った顔をする。

「手を洗ってから、宿題しようね」

背中に手を添えて彼を促すと素直に手洗い場へ向かっていく。飼育ケースに目を戻すとキアゲハの幼虫はすっかりツノを引っ込め、パセリの葉に口をつけている。私は飼育ケースの蓋を閉めると事務デスクに戻った。

その日の帰り道、一緒に下校する子供たちに今朝の電車での武勇伝を話した。「そんな大きい虫、やだー」「そんなん触りたくない」虫を怖がる子供たちの中で、「すげー」と恭太郎がはしゃいだ声を上げる。

「オオカマキリ、俺も捕まえたい。トノサマバッタなら捕まえたことあるんだけど、オオカマキリはないなー」

私は野球帽越し彼の頭に軽く手を置く。

「今度、学校の畑の方で探してみようね」

反対の手を引っ張られてそちらを見ると、菜波が大きな目でこちらを見上げている。

「私も捕まえに行きたい」

ねだるような甘えた声で訴える彼女の様子

に私は笑ってうなずいた。
「いいよ、一緒に行こうね」
彼女は私の手を握ると嬉しそうに笑った。

翌日、ノビッコで最後に残った子供を親が迎えに来たのは午後七時ちょうどだった。「時間ギリギリですみません」と頭を下げる親と「ママ、遅いよ」と文句を言う子供を見送ると、今日の仕事は終わりだ。
正規指導員の前野さんと明日の子供たちの出欠確認と午前中にしておく業務の確認をした後、ノビッコの玄関を出る。玄関ポーチで明日の早番の前野さんが施錠し、鍵をカバンにしまうのを見守ってから、私は彼女に別れを告げた。前野さんは電動自転車で通勤しているので、駅までの道のりは私一人だった。
人通りは全くない。通学路だけあって、街灯が要所要所にあるが、街灯と街灯の狭間にほんの小さな闇が濃くうずくまっている。大きな家の長い垣根の内、収穫が終わった畑の隅、何かがいても分からない。でも、そこには何にもないことを私は知っている。信じている。私は足早に歩き去る。
駅から電車に乗る。電車は帰宅客で混雑している。車両を見渡した時、黒色のリュックを抱えた赤い袖が目に入った。アゲハがロングシートの中ほどに座っている。スマートフォンを見ていて私には気が付いていないようだ。私はそのシートの端の席の前の吊革につかまると彼女の服装を横目で盗み見た。白いスカートの裾の縁取りは赤。膝から下に伸びる素足の先にピンク色のソックスと黒の皮靴。今日はアカスジシロコケガだ。
下車駅に停車すると、彼女は立ち上がる。私は彼女の全身像を見たくて一瞥をくれる。その時、彼女と目があった。何か物問いたげな瞳の動き。私はさりげなく視線を外すとホームへと降りた。
「あの、すみません」
背中に声がかかる。振り向くとアゲハがいた。
「昨日、服についてたカマキリを取ってくれた人ですよね」
覚えていてくれたんだ。冴えない服装に眼鏡をかけた中年女性を見分けてくれた。私は彼女の方に向き直るとうなずいた。
「あの時はありがとうございました。私、本当に虫が苦手で、もうどうしていいか分からなくて、本当に助かりました」
彼女はぺこりと頭を下げる。ホームの蛍光灯に照らされた光沢のある赤いブラウスがてらりと光る。ああ、この輝きはガじゃなくてオオセンチコガネだ。
「私、虫には慣れてるから大丈夫よ」
「慣れてるって？　昆虫の先生ですか」
彼女は自分でそう言いながら笑う。
「昆虫の先生って、あたし、何言ってるんだろ。自分で言ってて笑えるわ」
あははと声を上げるテンションの高い姿は予想外だった。私は戸惑いながら当たり障りのない答えを返す。
「私、学童の先生をしてて、子供とよく虫取りをするんで」
「そうなんですね。あたし、子供のころから本当に虫が苦手でぇ」
私たちはどちらともなく改札の方に向かって歩き始める。
「小学校の時に山へ遠足に行ったんですけど、お昼に開けた場所にシートを敷いてお弁当食べるじゃないですかぁ。あたし、それができなかったんです」
なんで？　と聞き返す間もなく彼女は話を続ける。
「地面にアリが歩いてるし、草むらからバッタが跳び出してくるし、小っちゃい虫は飛び回って寄って来るし、その場に座ることができなくて」
それでどうしたの？　と声を出す前に彼女はまた話し続ける。

「先生に言ってもどうしようもできなくて、あたし、立ちながらジャージの中でおにぎり食べたんです」
ハテナが頭の中に浮かぶ。彼女はリュックのポケットからパスケースを取り出すと淀みなく改札機を通り抜ける。私も慌ててカバンからパスケースを出して後に続く。改札から出ると私たちは立ち止まった。
「あたし、こっち方面なんです」
彼女が南口の方を指差す。私と反対側の出口だった。
「あ、私は北口の方」
「じゃ、ここでお別れですね。本当にありがとうございました」
と頭を下げると彼女は南口の方へ歩いて行く。私は何も言えず、ただ彼女の姿を見送った。
あんな風に話すのか。一人でしゃべり出してさっさと去っていった。服装とは別のインパクトがある子。虫が苦手なくせに虫のような色彩の服を着ていておかしい。私は足取り重く北口に向かって歩き出した。
家にたどりつくと、玄関から出てくる海里に鉢合わせた。
「真美ちゃん、お帰りなさい」
「ただいま。海里、来てたんだ。今から家に帰るの？」
「うん、母さんが家に着いたって」
海里の家はここから歩いて二十分ほど、駅を超えた向こう側にある。
「駅まで送っていく」
私は彼の横に連れ添って今入ってきたばかりの門を出る。
「えー、大丈夫だよ。俺、男だし」
「今は、男も女も関係ないよ。通り魔も人さらいも無差別。SDGs」
「SDGs は違うだろ。それにこのサイズの男をさらう人はいないよ」
海里は笑いながら私を見る。痩身ではあるが、一七五センチほどある彼は男性の体つきだった。
「真美ちゃんの方が帰り一人で危ないじゃん」
「いやいや、今も一人で駅から帰ってきたところだし。こんな大きなおばちゃんが襲われる気がしないわ」
私も笑いながら答える。一七〇センチで体つきがしっかりしている私の容姿は女性らしさが薄い。エラの張った顔型に太いフレームの眼鏡もその一因かもしれない。
私たちは並んで駅の方へ歩き出す。
「そうそう、昨日電車の中でオオカマキリ捕まえたよ」
「電車にオオカマキリいたの？　すげぇ。この間、道路を歩いてるハラビロカマキリ見たけど、やっぱかっこいいよな。あの孤高な感じがいい」
急に小学生と同じテンションになった様子はおかしかった。海里は小さい時から昆虫が好きだ。
河川敷の草原の中で虫取り網を持って走る五歳の海里。その後ろで虫かごを持って走る私。
「真美ちゃん、虫かご早く、早く」
地べたに伏された虫網の縁を押さえながら海里が高い声で叫ぶ。追いついた私に虫かごの蓋を開けさせると、網の中から片手で虫を取り出そうとする。もう片方の手は網のふちを押さえているため、片手だけではうまく虫がつかめないようだ。私は虫網のふちを代わりに押さえてあげた。海里が網の中に両手を入れて虫を捕まえる。
「痛い痛い」と言って抜き出した手はカマキリをしっかり捕まえていた。カマのようになっている前脚が彼の指をはさんでいて、カマキリが海里を捕まえているようにも見えた。海里は手早く虫かごに手を突っ込む。虫かごの透明な底板にカマキリの後ろ脚四本が接地すると、カマキリは海里の指から前脚を離した。
虫かごを覗きこみながら「ウチに持って帰

って飼う」とはしゃぐ海里に私は困惑する。カマキリって飼えるの？　エサはどうするの？

「カマキリは狭いかごの中より広い野原の方が嬉しいんじゃないかな」

私の諭すような言葉に対して、海里は「連れて帰る」「ウチで飼う」と横に首を振るばかり。テコでも動かなそうなその強い意志と瞳に私は根負けした。父親は海外に単身赴任中、母親は過労と病気で長期入院療養中。一人で祖父母の家に放り込まれた五歳の子供の望みを無下にすることができなかったのだ。

私が回想してる間も、高校生になった海里はあの日と同じ熱量で昆虫について語る。その純粋さに私は安心していた。

三連休明けの火曜日は早番だった。駅のホームのいつも並ぶ女性専用車両の乗り場の先頭にアゲハは並んでいた。私は彼女に気づかれないようそっとその列の最後尾につく。前に並ぶ二人の頭越しに彼女の服装を観察する。

今日のブラウスはオレンジ色の生地に黒いヒョウ柄のような小さなドットがプリントされている。ツマグロヒョウモンのオスだ。緑色のスカートに白いリュック。

電車に乗り込む時に、彼女は左側の通路に立ったので、私は反対側の右側の通路の奥へ入り込む。彼女のおしゃべりより、彼女の服装の方が私には好ましかった。黙って見ているだけでよかった。電車を降りる際、彼女は私に気が付いたようで目があった。彼女が嬉しそうに会釈する。私も軽く会釈するとそそくさと電車を降りた。

小学校へ向かう道路は緩やかな登り坂になるにつれ、住宅と住宅の間に畑の割り合いが増えてくる。畑の脇の雑草に小さなシジミチョウが止まっている。私は自然としゃがんでまじまじと見る。小学生の頃のことを思い出す。

「真美ちゃんって、なんか変わってるよね」

私はしゃがんだまま、顔をあげた。同じクラスの女子二人が私の横に立ってこちらを見ている。彼女たちの影に驚いたのかシロツメクサの花に止まっていたシジミチョウが小さな翅をせわしく羽ばたかせて飛んでいく。

「何見てるの」

彼女たちは私の足元を見る。

「チョウ」

私は隣の花へと降り立ったシジミチョウを目で追う。

「私、虫嫌い」「うん、気持ち悪いよね」

頭の上で繰り広げられる会話に口をはさむ。

「気持ち悪くないよ。模様が可愛いし、色もきれい」

このシジミチョウも白い翅に黒い点が並んでいて可愛かったし、翅を広げると青と灰色が混ざった色できれいだった。何より翅の表と裏の色が違うのが不思議だ。モンシロチョウは表も裏も同じ模様なのに。

ブーンと羽音をたてて小さなミツバチがやって来る。

「きゃー、ハチ」「怖い」

二人は身をすくめて後ずさりする。ハチの方は人を恐れもせずに足元のシロツメクサの花に止まる。小さなミツバチだった。

「じっとしてたら刺さないよ」

私は花に止まって蜜を吸う一センチほどのミツバチを見つめる。黒い胸に黄色い産毛がモフッとして可愛らしい。ミツバチは次々と花を変えて飛び回る。

「やっぱり変な子」「あっち行こ」

そう言って女子二人は去っていく。私は黙って花に止まるミツバチの黒と黄色のコントラストを眺めていた。

シジミチョウが目の前を飛んでいき、私は我に返る。小学校の高学年になると周りの女の子たちは昆虫に興味を持たなかった。だから、ちょっと変わってると言われるのは慣れていたし、自分でも少しそう思っていた。だ

から、教室では無口な子だった。大人になるにつれ人との付き合い方を心得てきたつもりだが、昆虫との無言の対話はやめることができないでいる。私は立ち上がってシジミチョウを見送るとまた歩き出した。

ノビッコに到着し、いつもの習慣で飼育ケースをのぞき込む。キアゲハの幼虫がさなぎになっていた。連休前、飼育ケースの中にさなぎになるための止まり木として木の枝を立てかけておいた。その枝の中間辺りにぶら下がるようにしてくっついている。三センチほどの枯葉色したそれはお尻をしっかりと枝に固定させ、上半身は細い透明な糸一本で枝に吊られている。さなぎになる様子を見れなかったのは残念だけれど、あと二週間ほどで蝶になることを考えると胸が躍った。

五時間目が終わる時刻になった。私はノビッコの玄関で子供たちを出迎える。火曜日は一年生だけが五時間授業、二年生以上は六時間授業の時間割だ。

「おかえり、さくらちゃん、美結ちゃん」

「福田さん、ただいま」「ただいまー」

「おかえり、尚人くん、理久くん、昂くん」

「ただいまー」

元気な子供たちの声が響く。続いて恭太朗が走りこんできて、大声で叫ぶ。

「福田さん、ただいまっ」

「おかえり、恭太朗くん。今日はいいものが見れるよ」

「なに？　なに？」

恭太朗が興味深々の顔で私にすがりつきそうなほど近くに寄ってきて、顔を見上げる。

「キアゲハがさなぎになったよ」

「マジ？」

恭太朗はくつを乱暴に脱ぎ捨てると、そのまま廊下を走ろうとする。

「恭太朗くん、くつはちゃんと靴箱にしまう。手洗いしてから見に行って。さなぎに触っちゃダメだよ」

恭太朗は靴脱ぎ場から急いで靴を取ると自分の靴箱に突っ込む。そして、手洗い場に駆け込んでいく。私はそんな恭太朗の姿を見送ると、新たにやって来た子供たちに声をかけ迎えた。

学童保育ノビッコは土曜日も子供を預かっている。両親がともに就業していて子供の世話をすることができない場合のみ、学童保育を利用していいことになっている。

たいてい十人ほどが朝九時までに登校してくる。午前中はまず学校の宿題やドリルで自習し、その後、自由時間。十二時に部屋の中で各自持参したお昼ご飯を食べる。昼食後はまた自由時間となり、十五時のおやつを挟んで自由時間、掃除、帰りの会で十七時を迎える。土曜日だけは延長保育がなく十七時に全員帰途につく。

今日は終日天気がいい予報なので、昼食後は少し歩いたところにあるお寺へ散歩することにした。

県下で安産祈願として有名なお寺は山裾に正門を持ち斜面に沿って何棟かのお堂が建っている。ほかにも芝生広場があったり小さな滝があったり山頂まで散策道が整備されていて、ハイキングコースとして人気があった。

小学四年生以下の子供たち九人が一斉に芝生広場に広がる。ドッヂビーをやるチームとその辺を散策するチームに分かれた。私と補助指導員の木村さんの二人で散策する子供たちの後を追う。

「バッタ取ろうぜ」「オレ、オオカマキリ探す」

恭太朗たちが広場と山際の斜面の境目に生えた草むらを掻き分けて、飛び出す虫を捕まえようとしている。草むらに入ってはオナモミを取って投げ合っている子。虫取りに飽きて鬼ごっこを始める子。

「山の方には入らないでよ」

私は声をかけながら、虫取りの子たちに付き合う。

「福田さん、バッタ捕まえた」
菜波がそばに寄ってくる。包むようにして差し出された両手のそばに私は顔を近づける。ゆっくりと開かれた手の中に緑色の小さなバッタがおとなしく止まっている。
「ショウリョウバッタだ。すばしっこいのに上手に捕まえたね。すごい」
私が褒めると菜波は嬉しそうに笑う。帽子の庇の下のクリっとした目が細くなる。彼女の身じろぎで我を取り返したかのようにバッタは手の平から跳んでいく。サッと取り押さえる間もなくバッタは草むらの中へ消えていった。
「今度はカマキリを探す」
菜波は草むらの中を歩き出す。
「カマキリはね、草むらの背の高い植物の葉陰にいたりするよ」
私は彼女とセイタカアワダチソウやススキなどが生えている辺りを探す。小柄な彼女は草むらに埋もれそうになりながら、一生懸命葉の裏側を見ている。彼女の頑張りに絆されて私もしばらく真剣に探したが、バッタや小さなガが飛び出してくるばかりでカマキリの姿は見つけられなかった。先ほどから子供たちが草むらを走り回ってるので、逃げてしまったかもしれない。
「福田さん、皆で滝の方に行きましょう」
ドッヂビーチームを見守っていた指導員の前野さんが声をかけてきた。ドッヂビーをしていた子たちを引き連れている。腕時計を見ると十四時半になるところだった。滝まで散策してそのまま学校に戻れば十五時半過ぎだろう。ちょっと遅いおやつを食べて、掃除して帰りの会をする。ちょうどいい時間配分だ。
「みんな、水筒置いてるところに集まって。これから滝の方に行くよ」
私は走り回っている子供たちに聞こえるよう大声を出す。そして、そばでまだ草を掻き分けている菜波にも声をかける。
「菜波ちゃん、カマキリはまた今度にしよう。滝を見てから帰るよ」
「えーっ、カマキリ捕まえたかったぁ」
菜波は残念そうな顔をする。
「もうちょっと探していい？」
「もう帰る時間だから、今日はもう終わり」
私は彼女の背中を押しながら皆がいる芝生に戻る。水筒や上着など各自の持ち物を忘れてないか確認してから、山の中へと続く散策道へと歩き出す。
樫や楢や楓の木の枝が頭上を覆い、木漏れ日が踏みしめられた小道にこぼれる。先ほどまで十月中旬とは思えないほどギラギラと照り付けていた日差しが分相応になった気がしてホッとする。子供たちも「気持ちいい」「涼しー」と声を上げている。
向こう側から年配のハイカーたちがやってくる。大人二人がやっとすれ違えるほどの道幅。先頭を歩く前野さんが「一列に並んで」と子供たちに注意を促す。
「こんにちは」
「こんにちはっ」「こんちわっ」
「元気いいねー」
「はい！　元気いっぱいです！」
ハイカーたちにすれ違いざまに声をかけられて子供たちは必要以上に騒ぐ。すぐに隊列は乱れて誰かが道を飛び出して林の中に入っては誰かに注意されて戻ってくる。大人で歩いて十分ほどの距離でも子供たちが歩くと倍かかってしまう。
「恭太朗くん、そんなところに入ってしゃがみこまない。道に戻ってきて」
「福田さん、これ見て」
道を逸れた林の中で恭太朗が立ち上がり戻ってくる。指で掴んでいたものを私に差し出した。私は手の平でそれを受け取る。黒くて固い翅を持った二センチほどのコクワガタだった。小さいけれど二本のツノを持っている。
「コクワガタだ。よく見つけたね」
私の声に二、三人の子供がのぞきこんでくる。

「うわ、小っちゃい」「でも、ちゃんとツノある。クワガタだ」「すげぇ」
「クワガタはあの木の樹液が好きだから。いると思ったんだ」
自慢げに話す恭太朗の帽子越しの頭に手を置く。
「見つけたのはすごい。でも、道から外れたのはダメ」
恭太朗の目を見て注意すると、彼は私から目を反らす。だが、唇を尖らせながら「はい」と小さく返答した。懲りてない時の顔だ。私は彼の頭にポンと軽く手を置きなおした。
「で、このコクワガタはどうする」
私は反対の手の上でおとなしくしている虫を恭太朗に差し出す。
「ウチには別のがいるから、この子は持って帰らない」
「そっか。じゃあ、この子はここで帰してあげよう」
恭太朗はコクワガタを指で摘まむと、元の木のところまで持って行こうとするのを止める。
「林の中に入らない。この木でいいよ。自分で好きなところに行けるから、大丈夫」
間近の楢の木を指さすと、彼はその木の根元に優しくコクワガタを置いた。
恭太朗を皆の後ろに合流させる。私は彼が横道に逸れそうになったり、しゃがみこんだりするのを注意しながら、しんがりを歩く。
水の音がする。サーッと軽い雨が降るような音。ザザザと水面を叩く音。眼前に小さな滝が現れた。高さ十メートルほどの岩崖の上から細く、しかし勢いよく水が流れている。流れ落ちた水は小さな池に溜まり、川となって散策道の脇を流れていく。小さな池の縁に祠があって、湿気と共に線香の香りが漂う。
子供たちはワァーとオーとか声を上げながら池の周りに群がる。他に見物している人がいなかったので、少しぐらい騒いでもいいかと大目に見ていたが、靴を脱いで池に入ろうとする子、祠を勝手に開けようとする子、岩肌に体を沿わせて手を伸ばし滝のしぶきに触ろうとする子と好き勝手なことをし始めるので、私達指導員は止めに入って諭さなければならず、落ち着いて景色を眺める時間はなかった。
「さあ、ノビッコに帰るよ」
ひとしきり騒いだ子供たちを集めて、川の脇の散策道に並ばせる。一人足りない。
「菜波ちゃんがいない」
私も前野さんも木村さんも顔を見合わす。どこに行った？　いつ、いなくなった？
「池に着いた時はいたよ」「うん、いた」
子供たちが声をあげる。
「それから、菜波ちゃんが何してたか、知ってる？　見てた人いる？」
「池の縁に立ってるの見た」「祠の前にいた」
子供たちが口々に言うのを聞きながら、私達指導員三人は意見を集約する。三人とも菜波が集団から抜ける場面を記憶していなかった。
池に落ちた？
集団の子供たちをその場で待つように指示し木村さんに任せると、私と前野さんは池の中を確認する。滝の流れる岩崖の下から池の縁をぐるりと回る。
「菜波ちゃん」
池の中を目を凝らして見る。滝が落ち込むところは白く泡立っているが、そこ以外は澄んでいて、底の石が見える。そんなに深くはない。菜波はピンク色のトレーナーを着ていたから沈んでいたら分かりそうなものだった。
「菜波ちゃん」「菜波ちゃーん」「どこにいるのぉ」子供たちがその場で大声を出して呼びかける。彼女からの返答はない。
川沿いの散策道からこちらに向かってハイカーが数人やって来る。子供たちの声を聞いて、いぶかしげに顔を寄せ合い、その中の一人の男性が「どうしたんですか」と声をかけてきた。私と前野さんは少々ためらったものの、

自分たちの見栄や保身よりもまずは情報を得る方が大事と結論付けて答える。
「小学生の女の子を見かけませんでしたか？ ここではぐれてしまったみたいで。このくらいの身長で白い帽子にピンク色のトレーナーを着た子です」
私は自分の脇腹の辺りに手をやる。上目遣いで見上げる彼女の顔が思い起こされ、不安が強まる。
「裏山口の方から来たけど、そんな子供は見なかったな。どうだった？」
男性がハイカー仲間に聞いているが、誰も首を横に振るばかりだった。
滝から流れ出る水は池に溜まり幅一メートルほどの川となって流れ、山を下っていく。その川沿いに作られた散策道はしばらく川と並走したあと、川を渡り山裾を緩やかにカーブしながら小学校の裏手に続く。そのルートは裏山口と呼ばれていた。
私達はハイカーの人たちにお礼を言う。
「そんな女の子がいないか気にしながら歩くよ」
「もし、見かけたらこちらに電話ください」
リュックの中からメモ帳とボールペンを取り出すとノビッコの電話番号を書いて男性に渡した。
これから菜波を探すためにどうしたらよいか。私達指導員は話し合った結果、私は来た道を戻りながら菜波を探し、前野さんと木村さんは子供たち八人を連れてノビッコに帰り、その後、木村さんが裏山口に戻って菜波を探すことになった。
私は芝生広場へとつながる散策道を戻る。三時過ぎの太陽は西の方へ傾いているもののまだ明るく、前方を歩くハイカーの背中をはっきりと照らしている。日没まであと二時間ぐらい。道から逸れて林の中に入ってしまったのなら明るいうちに探さないといけない。
「菜波ちゃん」
私は道を挟んで左右に広がる山林の右を見ながら声をかけ、左を見ながら声をかける。道沿いの斜面に足を滑らせたかもしれない。木々の隙間を注意深く目を凝らす。何か見つけて林の中に入り込んだかもしれない。恭太朗のように。
そういえば、菜波は恭太朗が捕まえたコクワガタを覗きに寄ってきた。「いいなぁ」とうらやましそうな顔をしていた。もしかして、コクワガタを取りに行ったのでは。私はコクワガタを逃がした辺りへ足を早める。
恭太朗がコクワガタを放したと思しき木のところにはコクワガタもいなかったし、菜波もいなかった。
「菜波ちゃん」
林の奥に向かって叫ぶ。林の中からは何も聞こえてこない。私は道を逸れてゆっくりと林の中に入る。木々の葉に覆われて陰になり日の光もほとんど射し込まない。下草が生えていないので歩きやすいことだけはありがたい。恭太朗がコクワガタを捕まえた辺りまで足を踏み入れたが、菜波の姿は見えなかった。
「菜波ちゃん」
私の声は土と木々に吸収されて響かない。これ以上奥に入ることはあるだろうか？ 菜波は甘えっ子だけど怖がりではないから、林の薄暗さも一人でいることも平気なのかもしれない。コクワガタを捕りに奥の方へ入っていった？ 彼女にそんな執着があったのだろうか？
『捕まえたかったぁ』と拗ねて甘えた声が頭の中に再生される。何を捕まえたかった？
カマキリだ。
私は足早に散策道に戻る。彼女は草むらの中でカマキリを捕まえようと一生懸命だった。もしかしたら、そこに戻ったのかもしれない。
左右の林の中をおざなりに見ながら、私は芝生広場へと急ぐ。
芝生広場では、ハイカーたちが座って休憩していたり、家族連れが遊んでいたりと賑やかだった。私は広場の端の草むらに跳び込む。

膝丈ほどの草を掻き分けて進む。走り回っている子供たちを避け、腰丈まである草むらにしゃがみこんで隠れている子供たちを覗き見る。黄色い花をつけたセイタカアワダチソウを掻き分けて下を見る。白い穂が輝くススキを掻き分け下を見る。カマキリがいそうな場所を探す。乱暴に人の手で掻き分けられたことに驚いて、カマキリが飛び出してくる。大きな体を小さな羽でかろうじて支えながら別の草むらに移っていく。

カマキリはいるのに菜波の姿はなかった。私は草むらの端に立ち、漫然と芝生広場を見渡す。ピンク色のトレーナーを着た少女の姿はどこにも見えなかった。

ジーンズのポケットでスマートフォンが鳴る。急いで取り出すと、前野さんからだった。

『菜波ちゃん、見つかった？』

彼女の期待を乗せた切羽詰まった問いかけに私はむなしく否定するだけだった。前野さんはいろいろと動いてくれていた。非番の指導員に連絡をして捜索を手伝ってもらうよう依頼したこと。菜波の親に連絡を入れて状況の説明とお詫びをしたこと。小学校の教頭先生に状況説明し、四時になっても見つからなかったら警察と教育委員会と市の青少年育成課に連絡を入れること。

「前野さん、大変な役を任せてしまってごめんなさい。親に説明するの大変だったでしょ」

『ここの代表指導員だから、これも私の仕事です』

「ご両親はどんな様子？」

『状況を受け入れるだけでいっぱいいっぱいだったみたい。今すぐノビッコに向かいます、て言われただけ。なので、私はここから動けないので、逐次状況を教えてください』

前野さんは私より若いのにしっかりしている。そして、どんな人に対しても小馬鹿にした態度を取らない。

私は電話を切るとしばらく黒い画面を見つめる。事態が大ごとになっていく。私は責任を取って指導員をやめないといけないかもしれない。やっと見つけた私の居場所だったのに。

スマートフォンの黒い画面には、セルフレームの眼鏡をかけた四角い顔の女が映っている。眼鏡の中の目は意地が悪そうに吊り上がっている。

大学を卒業してから入社した会社は事務用品を扱う会社の内勤だった。私は学生時代から変わっていると言われてきているので、会社では必要なこと以外話さないようにしていた。それでも、仕事はきちんとこなしていたつもりだった。

ある時、先輩の女性たちから始まった陰口が私の会社での居場所をなくした。

「あの子、私たちのことを話しかける価値のない人たちだって、見下してるよね」

「うちらが馬鹿話で騒いでたら、あのキツい眼付でにらんでくるの、嫌な感じ」

「大した仕事してるわけじゃないのに、いかにも出来ますって顔してさ、高慢な女」

そこまで視力が悪くないのに眼鏡をかけるようになったのはそれからだった。吊り上がった目尻を少しでも隠したいと思ったからだ。ただ、そんなことだけで状況が変わる訳もなく、私は三年勤めてその会社を辞めた。その後は、実家の世話になりながら、短期のアルバイトを転々と繰り返してきた。

三十五歳の時、甥の海里が実家にやって来た。海里の父親は海外へ単身赴任中で、海里の母親である妹の留美は働きながら一人で家事も育児もこなしていた。その無理が祟ったのか、内臓疾患で急遽入院することになり、海里は祖父母が預かることになったのだ。

五歳の海里は元気だった。保育園への送り迎え、朝起きてから夜寝るまでの世話は、体力的にも時間的にも余裕のある私の役割だった。土日は留美が入院する病院へ連れていき、その帰りに河川敷に行って虫取りをした。捕まえたバッタやカマキリを家で飼い、家庭菜

園に集まる蝶やテントウムシを愛でた。一緒に昆虫図鑑を読んだ。絵本も読んだ。仮面ライダーも観た。アニメも観た。トトロのＤＶＤを観た後、「海里もトウモロコシ作って、ママに持って行く」と言うから種を買ってきて家の庭に植えてみた。十センチほどの短くて粒が不ぞろいな実しかならず、海里は残念そうな顔で実をもいで、でも大事そうに両手で持って病院へ行った。

ある日、保育園へお迎えに行くと、よその子供が「いつもおばちゃんが迎えに来てるけど、海里くんのママいないの？」と悪気なしに聞いてきた。海里が「ママは病院にいるから来れないの」と怒ったように答える。私はどう対応するのが正解なのか分からず、見ぬふり聞かぬふりをしてしまった。

家への帰り道、後ろめたさを隠しながら手をつないで歩いていると、海里が私の手を引いた。見下ろすと勝気そうな瞳がこちらを見上げている。私は道端にしゃがみこみ海里と目線を合わせた。

「毎日、真美ちゃんがきてくれるから嬉しい」

海里は笑って私の眼鏡の縁から手を入れて指先で目尻を押さえる。

「真美ちゃんの目はママの目と同じだから好き」

私は目を見開く。海里の少し吊り上がった目が血のつながりを感じさせた。愛しい子の目は私と同じ目をしている。オレンジ色の夕日が当たり瞳が輝いていてきれいだった。思わず海里を抱きしめた。海里も小さな腕で私の頭をぎゅっと抱きしめる。夕日はとても暖かく私たちを包んでくれた。

私がちゃんとした仕事を探し始めたのはそれからだ。入退院を繰り返していた留美は一年後に正式に退院し、海里も自分の家に戻っていった。それと同時に私は市が運営する学童保育の正規指導員として働くことが決まった。

それから九年。いくつかの小学校の学童保育に勤務してきたが、その間、子供が行方不明になったことなどなかった。

私はスマートフォンをポケットにしまうと立ち上がる。草むらを掻き分けるとその奥に生える林の中へ入る。楢や楓が生える木々の合間をさまよう。手前はドングリや落ち葉を拾えそうな平坦な場所だったが、そのすぐ奥は急な斜面になり薄暗い林が広がっている。人の姿は全く見られなかった。

山際を調べ終わると三時半を過ぎていた。私は芝生広場を横切ってお寺の正門へと向かう。来た道を戻る以外に探す方法が思い浮かばない。

境内は広くいくつもの塔やお堂が建っていて、参拝者が多く見られる。お宮参りの着物姿で赤ちゃんを抱えている家族たち。お腹の大きな女性たち。ここは安産祈願のお寺だったと改めて意識づけられる。

私はその中でひたすらピンク色を探す。赤、黒、紫。女の子の服をひたすら見ていると、青地に黄色の模様が入ったアオスジアゲハの姿が目に飛び込んでくる。

「あっ」

思わず声を上げてしまってから口を押える。

それはアゲハだった。駅以外で見るアゲハの姿には現実味が感じられず、私はただただ、彼女を呆然と見つめる。私の声に振り向いた彼女は私に気が付きまっすぐこちらにやって来る。青地に黄色と黒の小さな三角模様が散ったブラウスに黒い膝丈のキュロットスカート。赤いポシェットを斜めに下げている。彼女は早足で寄ってくると、私に向かって滔々と話し始めた。

「えっと、カマキリさんですよね。こんなところで出会うなんて偶然ですねぇ。あ、でも、降りる駅が一緒だから生活範囲も一緒だしそこまで意外でもないか。でね、偶然ついでにお願いがあります。今忙しいですかぁ。時間があるならちょっと一緒に」

彼女の話は淀みなく流れ、私が無理矢理に

止めに入る。
「ごめんなさい。今、人を探してて」
「女の子を探してほしいんです」
私の声と彼女の声が重なった。思わず顔を見合わせる。
「もしかして、菜波ちゃんのことですか」
私の問いに彼女はコクコクと首を縦に振る。
「ナナちゃんはあたしの姪っ子なんです。兄から急に電話がかかってきて、ナナちゃんがいなくなったって」
菜波がアゲハと親戚だなんて思いもしなかった。
「申し訳ありません」
私は頭を下げる。
「私たちの不注意で大事なお子さんを見失ってしまって、本当にすみません」
「そっかぁ、カマキリさん、学童の先生って言ってましたね。ナナちゃんの学童だったんだぁ」
カマキリさん、って私のこと？　私の頭に湧いた疑問を無視して彼女の話は続く。
「そんなところで繋がっているなんて奇遇。世の中狭いですねぇ。そういえば」
アゲハのおしゃべりを遮るように私のスマートフォンが鳴る。私はすかさず電話に出た。
『新川です。お寺の門前に来ました。北さんと矢倉さんもいます。どうしましょう』
ノビッコの非番の指導員たちからだった。
「私は参道の階段の上にいるので、菜波ちゃんを探しながら上がってきてください。合流しましょう」
私は電話を切るとアゲハに向き直った。
「ノビッコの指導員が到着しました。合流しますが、あなたも一緒に来てもらってもいいですか」
彼女の表情が引き締まり、黙ってうなずいた。
「菜波ちゃんのご両親はどのぐらいで来れそうですか。あなた以外にも探しに来てる方はいますか」
「兄の職場は離れているので、あと三十分はかかるんじゃないかな。サトコさん、ナナちゃんのお母さんは職場が小学校に近いからもうそっちに着いてるはず。あと、祖父母にあたる私の両親は九州に旅行中で来られないし。兄が私以外誰に連絡したかは分からないです」
彼女の饒舌さは変わらないが、状況はよく分かった。私は改まって自己紹介した。
「私はノビッコの福田真美と言います。あなたの名前を教えてください」
「岡本千珠（おかもとちず）」
アゲハは端的に名前だけ名乗るとこちらを見つめる。私は彼女の視線に戸惑い目を背けた。今まで駅でずっと眺めるだけだった私は彼女の視線にも言葉にも緊張してしまう。背けた視線の先に青いブラウスが西日を受けて反射している。
非番の指導員三人と合流した私たちはお寺からすでに外に出てしまった可能性も考えて、お寺から学校へ戻る道をその指導員三人に探してもらうことにし、私はアゲハと一緒にもう一度お寺の敷地を探すことにした。
斜光差す境内は明るいオレンジ色に包まれていた。建物や木々の影が黒く長く伸び、太陽が山際に近づいている。
私は前野さんに電話する。新川さんたち三人にお寺の正門から学校までのルートを探してもらっていること、菜波の親族と合流したこと、自分たちは再度お寺の敷地内を探すことを伝える。前野さんからは菜波の母親やクラス担任や他の先生や指導員が来て、裏山口の方へ探索に出たこと、四時になったら教頭先生が警察に電話することを聞いた。
もうじき四時になる。日没は五時。明るいうちに見つけなければ。
「境内の中は広いから隈なく探すの大変ですねぇ。人結構いるし。建物の裏手にいたら見えないよ。ここ五重の塔とかお堂とかいっぱいあるから、全部探すの無理。もし、誰かに

連れ去られてたらもうここにはいないんじゃない」
　アゲハの言葉にギョッとする。縁起でもないことを、と思いながらも、探して一時間近く経つからその可能性も視野に入れなければいけないと覚悟した。
　私は参道を通って家に帰るのであろう人々を黙って見遣る。子供と手をつなぐ家族連れをじっと見る。大きなリュックを背負うハイカーをじっと見る。子供の中に菜波が紛れていないか、リュックの中に菜波が入っていないか。だが、子供の中に菜波はいなかったし、菜波が入れるほどの大きさのリュックを背負っている人もいなかった。
　アゲハは参道の脇に建つ小さなお堂の周りを探しては戻り、また別のお堂の周りを探しては戻って来る。建物の影を縫うようにして動く姿は夕闇を飛ぶアオスジアゲハのようで、少し安心する。
　やはり、菜波はカマキリを探しているのではないだろうか。こんな建物や参道よりもあの草むらに居る確率の方が高い気がした。
　私は先ほど探した芝生広場へ早足で戻る。
「急にどうしたんですかぁ。どこ行くんですかぁ」
　アゲハが後ろから追いかけてくる声が聞こえたが、私は振り向かずに走った。
　何にも遮られることなくオレンジ色の光を受けた芝生広場はほとんど人がいなかった。菜波らしき少女の姿も見られない。脇の草むらに目を向ける。セイタカアワダチソウが茂る辺りで動いているものがあった。
「菜波ちゃん」
　私はそこへ駆け寄る。草むらを掻き分けて菜波が姿を現した。私を見ると立ち尽くし、大きな目からポロポロと涙をこぼす。
「よかった。もう大丈夫」
　私はその涙で濡れた顔を自分のお腹に押し込むように抱きしめた。菜波は私のトレーナーを掴むとしばらくの間声もなく泣いた。
「どこか怪我はない？」
　私はかがみこんで菜波の肩に手を置きながら目線を合わせる。菜波はしゃくりあげながら首を横に振った。
「ナナちゃん、もう心配したよぉ」
　アゲハも隣にしゃがみこんで菜波の手をとる。菜波はアゲハの顔をちらっと見たが、黙ったまま私の方に視線を戻し、そのまま下を向く。
「ごめんなさい」
　消え入りそうな声で言葉を紡ぐ。
「どうしてもカマキリを捕まえたくて。滝のところから離れてこっちに来たの」
　菜波の覚束ない説明をまとめると、皆が滝の周りを散策している最中に、カマキリを捕まえるため一人でこの芝生広場に戻ったらしい。しばらくカマキリを探して、見つけられなかったので、滝のところに戻ったら誰もいなかったそうだ。それから、芝生広場と滝を行ったり来たりして、ノビッコの誰かが来るのを待っていたと言う。
「なんにしても無事でよかったぁ」
　アゲハは立ち上がってポケットからスマートフォンを取り出すとその場を少し離れる。私も菜波の肩を抱いたまま、前野さんに電話をかける。私の報告に、電話口の向こう側は慌ただしくなった。ちょうど教頭先生が警察に電話をして事情を説明しているところだったようで、『今見つかったみたいなので、問題解決しました。ご迷惑をおかけしました』と謝っている声や『お母さんに電話して』と指示を出す声、『菜波ちゃん、見つかったの』『よかったー』と遠くの方で子供たちが騒ぐ声が聞こえてくる。
　菜波を連れてノビッコへ帰るようにという指示を聞いてから電話を切る。菜波と目を合わせて声をかける。
「ノビッコに戻ろう。お母さんも待ってるよ」
「ママとパパに叱られないかな」
「一緒に謝ろう」

心配そうな顔をする彼女の背を押し歩みを促す。
アゲハにもお礼をと思って辺りを見回したが、彼女の姿は見えなかった。こんなに見通しがいい広場から忽然と姿を消すなんて。私はうろたえる。
不意に右手に温かいものが触れる。菜波の手が私の人差し指と中指を握った。そして、甘えるように上目遣いでねだる。
「福田さん、また今度一緒にカマキリ捕まえよう」
うろたえていた心が瞬時に落ち着き、温かいものが満ちる。アゲハの心配は後回しでいい。私が今心配すべきは彼女だ。
「そうだね。カマキリだけじゃなく、スズムシやアキアカネも探そう」
私はしっかり手をつなぐと学校に向かって進み出す。夕日が菜波と私と世界を赤々と照らしていた。

帰宅の途についたのは夜の七時過ぎだった。辺りはすっかり夜の闇に飲み込まれている。空を見上げると月はなく、小さな星も暗い空に埋もれていきそうだ。私は深くため息をついた。
私が菜波をノビッコに連れて帰ると、菜波の母親は泣きながら無事を安堵し、菜波も泣きながら謝った。私を含めた指導員たちに留まらず教頭先生や担任までもが一緒になって、菜波母子に謝罪した。
大人同士のやり取りがひと段落ついた後、隣の部屋で様子をうかがっていた子供たちが菜波を取り囲む。
「心配したよ」「どこ行ってたの」「うちらの呼び声聞こえた？」
子供たちは口々に菜波に話しかける。菜波は一斉に声をかけられて怖じ気づいたように母親に身を寄せた。
「さあ、五時になるから帰る準備をしようか」
前野さんが子供たちに声をかけ、帰り支度をさせている間、私は菜波と母親を一足早く帰すため玄関へと案内する。
「本日はこちらの監督不行き届きでご心配をおかけして、本当に申し訳ありませんでした」
扉を出た先で、私は深々と頭を下げる。
「これからはより一層気を付けてお子様を見守りますので、今後ともよろしくお願いします」
母親は釈然としない顔でこちらに頭を下げると菜波の手を引いて歩き出す。
「福田さん、さようなら」
菜波がこちらを振り返り手を振る。私はまた頭を下げて送り出した。
駅までの道は闇の帳が降りたように暗く重々しい。足取りも重い。
先ほど見た菜波の母親の顔を思い出す。恐らく、今回の事の次第に納得がいってないのだろう。菜波が勝手に動いたのだとしても、それに気づき、止めるのが指導員の仕事だ。私は指導員の役目を果たせなかった。
ふと足を止めた。街灯と街灯の間、垣根の陰に誰かがいる。私は身をすくめ息をのんだ。
「お帰り遅いですね」
暗闇から出てきたのはアゲハだった。色白の顔がぼんやり浮かび、人ならざる者に見える。私は半歩後ずさった。
「あなたを待っていたんです。まさかこんなに暗くなるまで学校にいるなんて思わなかったから、だいぶ待ちぼうけしちゃいました」
彼女は私の前にやって来て、しゃべり続ける。
「だから、さっさと行きましょう。ちょっと付き合ってください」
アゲハは暗い道を駅に向かって足早に進んでいく。私は慌てて彼女を追いかける。
「どこに行くんですか。菜波ちゃんの家ですか？」
「えー、まさかぁ。私、サトコさんに嫌われてるから行かないよ。だって、あの人、排他的だもん。自分の考えから外れるものは認め

てくれないの。全部シャットアウト。そして、すぐ態度に出るから、あたしを受け入れてないのも丸分かり」
菜波の母親の納得していない表情が頭に浮かび、アゲハの言葉はあながち嘘じゃないのかもしれないと思う。
「ナナちゃんもあたしのこと好きじゃないし。ほら、ナナちゃんはとっても甘えん坊じゃないですかぁ。あたし、その甘えを全部無視してるから」
「姪なのに？」
姪や甥は無条件で可愛がってあげられる対象じゃないのだろうか。海里の顔が頭の隅をよぎる。
「姪とか関係ないです。甘えれば何でも自分の思うとおりになると思ってる根性が嫌いなの。あの年齢にして、自分の可愛さを分かってるし、その使い方も分かってる。すごいですよねぇ」
あまりにもあっけらかんと毒を吐くので、私は呆気にとられた。
「カマキリさんもそう思いませんか。あ、もうすでに絆されてるから気づかないですかぁ」
「絆されてる？」
「そう、篭絡されてる」
彼女の言い方にカチンとしてつい言い返す。
「菜波ちゃんの甘えは年相応です。私は子供たち一人一人のことを見て対応してるだけ」
私の反論に彼女はフフンと軽く鼻で笑った。そして、私の方へ手を伸ばすとおもむろに手を掴まれた。思わず手を引っ込めると、たやすく振り払えてホッとする。
「案外まともなんだ。残念」
アゲハはまた前を向くと急ぎ足で進む。街灯に照らされた彼女の青いブラウスが妖しげに私を誘う。戸惑いながらもそれが必然であるかのように私はアゲハの後ろに付いて歩いた。
踏切を渡って駅を通り越す。しばらく歩くと旧国道に出た。飲食店やディスカウントストアや家電量販店などの看板が夜の街を明るく照らす。車のヘッドライトやテールランプが次々と流れていく道路に沿ってアゲハはずんずんと進んでいく。その間、彼女のおしゃべりは途絶えない。
「どこに行くの？」「何がしたいの？」
私の問いには答えず、彼女は今、ディスカウントストアのキャラクターについて語っている。「身長九十八センチって設定なのに、着ぐるみは百七十センチぐらいあるし、ぬいぐるみは七十五センチしかないし、その設定の意味わかんないわぁ」
旧国道は徐々に上り坂となり高架橋へと続いていく。高架橋のたもとで下道の方へ逸れ、しばらく下道を歩くと、アゲハはある建物の前で止まった。
「ここです」
辿り着いたのは一見シティホテルのように見えるラブホテルだった。駐車場にはカーテンがぶら下がっているし、入り口には『レスト二九〇〇円から』と書いてあるからきっとそうだろう。
「ここに入るの？　どういうこと？」
「大丈夫、大丈夫」
アゲハは軽く言うとサッサと自動扉をくぐる。扉の向こうには各部屋の写真が載ったパネルが見え、私の足はすくんだ。私がついてこないことに気が付いたアゲハは、戻ってきて私の手を掴む。その手を振り払おうとしたが今度は振りほどくことができなかった。細い指が私の手首に食い込むほど強く握っている。勢いよく引っ張られ、私はホテルの中へ足を踏み入れた。
彼女は私の手首を掴んだまま、パネルの前に立つ。「あの部屋埋まってるなぁ。こっちの部屋でいいか」と独り言を言いながら、私を掴んでいない方の手でパネルのボタンを押す。
彼女は有無を言わさず私を引っ張りながら、突き当りの階段を上がる。私の方が背が高いし体も大きい。恐らく私が本気で力を出せば、

彼女を拒むことは簡単だろう。だから、かえって突き飛ばすことができなかった。とりあえず、彼女の意図を確認して、いざとなったら突き放したらいい。

私はおとなしく彼女についていく。彼女は躊躇せず二階の突き当りの部屋の扉を開けた。

部屋の中は薄暗く、曇りガラスの窓から射し込む白い街灯だけが唯一の明かりだった。彼女は窓のカーテンを閉めると慣れた手つきでベッドの枕もとのスイッチを入れる。

私はあっと短く声を上げた。

天井の間接照明に柔らかく照らされた壁一面に極彩色に彩られた蝶が舞っている。黒い輪郭に縁どられた蝶たちの翅。網目ごとにショッキングピンク、シアンブルー、エメラルドグリーン、クロムイエローと病的な配色がほどこされている。一面に散った蝶はとても圧倒的だが、とても人造的だった。

「本当は、カマキリの部屋を見てもらいたかったんですけど、埋まってたので。チョウの部屋にしましたぁ」

アゲハは満足そうに語り出す。

「このホテルの内装はあたしがコーディネートしたの。ここのオーナーは虫好きで、虫をモチーフにしてほしいって依頼されて。各フロアに一室ずつこんな部屋があるんです。この壁紙もあたしのデザイン。虫嫌いだから、デザイン考えるの苦労したけど、いい仕事したわぁ。おしゃれでしょ。虫好きのあなたに見せたかったの」

私は壁紙から目を反らし、アゲハを見る。ベッドの枕もとに灯るピンク色のライトを受けてアゲハの目が妖しくきらめいた。

「あなたが駅のホームであたしのことを見ているの、ずっと前から知ってました」

私の脈がドクドクと音が聞こえそうなほど激しくなる。気づかれていないと思って無遠慮に見ていたことを本人から暴かれてしまった。腋の下に汗がにじむ。口を開きかけたものの言葉は何も出なかった。

「背の高い眼鏡の女の人が横目でにらみつけてくるから、なんか怖くて気づかないふりしてたんです。でも、あたし、気づいちゃったんだ」

彼女は嬉しそうな顔で私を見る。心臓がドクンと高鳴った。

「あたしのこと好きですよね」

びっくりして彼女の顔をしっかりと見る。彼女は至極真面目そうな顔で、それでいて楽しそうな目をしていた。彼女の見当違いの言葉に、私は安心するよりも落ち着かなくなった。

「にらんでるんじゃなくて、見惚れるんだって気づいちゃって。嫌な気はしなかった。あたし、女だから男だからって思わないタイプなんで」

細い目が私を見上げる。

「背が高くて、小顔で、目尻がキュッと上がっていて、中性的な雰囲気がとてもいい。眼鏡、外していい？」

彼女は私の顔の横に両手を伸ばす。私は動くこともできず突っ立ったままだ。彼女の指が眼鏡のツルを掴んで顔から外す。外した眼鏡をベッドの上に放った。

私の吊り上がった目を見て、彼女は嬉しそうにうなずいた。

「こっちの方がずっと似合ってる。好き。で、あなたはあたしのどこが好き？」

アゲハが顔をかしげて尋ねる。それは、勘違いだ。私は焦ってしまい落ち着いて説明することができなかった。

「違う、違う。そうじゃない。そうじゃないの。私はあなたの事好きじゃなくて、いや、嫌いってわけではないんだけど。私は、あなたじゃなくて、あなたの服が好きなの」

「服？」

アゲハは顔をかしげたまま、不思議そうな声を出す。

「あなたの服の色が好きなの。色の組み合わせが好き」

私の簡潔な返答にアゲハはからかうような声音で言う。
「えー、あたし自身には興味がないということ？」
「興味はあるわ。何故、あなたがそんな色の服を着るのか知りたい」
「そんなこと？」
アゲハは拍子抜けしたような顔をする。
「あたしが着たいからに決まってるじゃない」
「なんで？　なんで、着たいと思うの？　着たいと思う理由は？」
私のしつこい問いかけにアゲハは身じろぎ、私から少し離れて強く言った。
「可愛いから。それ以上の理由はない」
「私も。私も可愛いと思う」
私は彼女の言葉に食いつく。
「青地に黄色と黒の柄はアオスジアゲハの翅の色。赤地に細くて黒い縦縞はスジグロボタルの翅。緑色地に黒で縁取られた赤い模様はニシキキンカメムシの翅。青地に赤や緑の模様はナミハンミョウのきらめく翅。全部全部あなたの服と同じ。可愛いよね。素敵だよね」
私は腕を伸ばし彼女のブラウスをなでる。青いサテン生地がライトの光を受け淡く光を反射する。
「気持ち悪い」
アゲハは私の手を払う。
「そんな虫と私の服を一緒にしないで。あたし、虫は大嫌いなんだからぁ」
アゲハは両手で自分の腕を抱える。怯えているようにも震えているようにも見える。私は思わず笑った。
「虫嫌いなのに虫のような服を着てて面白いね」
「これは虫じゃないの。サイケデリック。芸術よ、芸術。ピーター・マックス、知らない？」
「サイケデリックってクスリの幻覚みたいなもんじゃなかった？　でも、芸術というのは合ってるかも。昆虫の色彩は自然が生み出した神秘的な芸術だわ」
「この昆虫狂い！　あたしのセンスをその辺の虫なんかと一緒にしないで」
アゲハはふてくされたような顔でベッドに勢いよく座る。ボフンと音をたてて布団が沈んだ。
私は言いたいことを言ったため興奮していた。壁紙の極彩色な蝶たちが頭の中にも飛び回っている。好きなことをしゃべることがこんなに気持ちがいいってことを初めて知った。
しかし、興奮の余韻は長くは続かなかった。次第に体の中の熱が冷めてくる。すると、余計なことをしゃべったのではないだろうかという後悔が湧き上がってきた。アゲハが長いこと黙っているのにも気が引けた。私は立ったまま彼女の様子をうかがった。アゲハは私の視線に気が付き、「座ればぁ」とけだるく言った。
私はアゲハから離れてベッドの端に座る。彼女を怒らせてしまっただろうか？　薄暗い部屋の中で壁紙の蝶を見つめる。見れば見るほど本物の蝶の美しさとの差が広がっていき、派手な破片が散っているだけのように見えた。
「カマキリさんも着てみたらぁ？」
アゲハの声と同時に私の太ももに布が投げられた。広げてみると、それはアゲハのブラウスだった。青いサテン生地がサラリと流れ、鈍く光る。
私は思わず横を見た。キャミソール姿のアゲハがこちらを見ていた。白い胸元と肩がピンク色のライトに晒されている。
「なんで脱いでるのよ」
目を反らして、ブラウスを彼女へ軽く放る。
「だから、そんなに気に入ってるなら、自分が着てみたらいいじゃん」
アゲハは立ち上がると、こちらに来て私の右肩にブラウスをかけた。
私はブラウスを手に取ると、胸の前に当て枕もとの壁に貼られた大きな鏡を見る。ピンク色の光に照らされて釣り目の大柄な女に青いサテン生地が当てられた様子は、ちぐはぐ

なアップリケを見ているようで滑稽だった。ブラウスを両手で摘まみ持ち上げる。青い生地に浮かぶ黄色と黒の三角模様は明らかにただの布で、どんなに光沢を帯びようともただの布でしかなかった。

「本当にその布が好きなのね」

アゲハが私の顔を覗き込むように身を寄せる。不意のことにのけぞって彼女から離れようとすると、彼女の白い肩や胸元が目に入った。ライトに照らされてピンク色に染まった肌は石膏でできた作り物みたいで気味が悪かった。私は彼女の左肩にブラウスをかけた。

「あなたの方が似合ってる。ちゃんと着て」

私は立ち上がってベッドから離れるとアゲハを見る。彼女は仕方ないといった様子でブラウスを羽織り、ボタンを留めていく。私はその様子をまじまじと見つめる。袖口のボタンを留めてブラウスをしっかり着こむと、いつも通勤で見かけるアゲハになる。無機質な青い布は体のラインに沿って鈍く艶めき、ただの女だったアゲハが一羽の蝶のように見えた。確かにそこに別の命を宿らせた別の生き物の姿を見た。

青い蝶は私の方に向かってくる。その姿に見惚れていると、青い蝶は伸びあがり私の唇にそっと触れた。背筋を溶かすような甘い感覚が私の体に広がる。私は目を閉じ、その幸せを享受したのも束の間に、蝶は私の唇から飛び立っていく。

「あたしも捨てたもんじゃないでしょう」

目を開くと、目の前にアゲハが立って私を見ていた。一重の目が嬉しそうにますます細くなる。

「今はまだ服を着たあたしで我慢します。でも、いつかは服がないあたしのことも見てもらえるようにガンバります。まずはお友達から始めましょう。人畜無害なお友達ですぅ」

すっかり甘い気分が抜け落ち、私は愕然とする。私の唇に触れたものは、蝶の翅でも口吻でもなく恐らく彼女の唇だ。私は自分の口を押えるとしゃがみこんだ。なんで彼女の口づけを受け入れてしまったのだろう。そして、そのことが不快じゃなかったことに少し混乱する。

「大丈夫ですか」

私が顔をあげるとアゲハが手を差し出してくれる。私はそれに捕まらず自力で立ち上がった。彼女を避けてベッドの上に投げ捨てられている眼鏡をかけ、カバンを手にする。

「え、え、もう帰っちゃうの。怒ってる？　嫌なことしてごめんなさい。でも、友達になりたいの。もっとお話ししたいのぉ」

アオスジアゲハのような彼女はしゃべるとただの岡本千珠になる。

「しゃべらなかったらいいのに」

思わず独り言が私の口から漏れ出る。

「無理ですぅ。あたし、しゃべらないと死んじゃう」

彼女は情けない声を上げつつも、私の後に続いて部屋を出る。彼女がああでもないこうでもないとしゃべるのを聞きながら、私はホテルを出ると駅を目指して歩き出した。

学校の五時間目が終わるチャイムが鳴った。十分後には、帰りの会を終えた一、二年生たちが玄関から出てくるだろう。私は学校の玄関の脇に立って待っていた。上を見上げると雲はなく、青い空には白く輝く太陽だけが浮かんでいる。とても十月とは思えないほど日差しが強い。

菜波が一時的に行方不明になったことについて、不問に付されるということはなかった。市の青少年育成課から正規指導員三名が呼び出しを受け、今後十分気を付けるようにと厳重注意を受けた。学校側からも子供の安全な管理を実施するよう頭を下げられた。でも、そんなことより辛かったのは、保護者からの信頼が揺らいでしまったことだった。

「菜波ちゃんはまだ小学二年生だから正しく

判断できないこともあります。そこを指導、管理するのが預かる側の責務だと思います」
「子供を危ない状況にさらした学童なんかに大切なわが子を預けることはできません」
「学童側が安全に預かる体制ができるまで、子供を行かせません」
菜波が行方不明になった翌々日の月曜日の夜に急遽開催された保護者会であがった意見に同意した親は複数人いた。そして、次の日からノビッコを休む子供が増えた。その欠席者の中に当事者の菜波や恭太朗も入っていた。もう三日ほどノビッコには来ていない。その間、来られない子供たちはどこかで預かってもらっているのだろうか。菜波は祖父母が預かってくれているという。私は今朝のことを思い出す。
早番の時間に合わせた電車に乗るため、私はいつもの女性専用車両の乗降口に並んでいた。いつもなら私より先に並んでいるはずのアゲハの姿は見えない。先週の土曜の夜、駅で彼女と別れてから、朝にも夜にも彼女を見かけなかった。あの日の夜のことは幻だったように思えてくる。疲れた夜に見た突拍子もない夢だったのではないだろうか。そんな空想をしていたら、後ろから背中を叩かれた。振り向くとアゲハが立っていた。
黄色いブラウスに黒い網目模様。耳に赤い玉と青い玉がぶら下がったピアスをしている。キアゲハだ。この鮮やかな黄色はアゲハチョウではなくキアゲハだ。
「ちょっとぉ、今あたしを見て、虫っぽいって思ったんじゃないですか？」
「なんで分かるの」
私は驚いて思わず問いかける。表情には出していないつもりだったのに。
「目が違うもん。ものすごくキラキラしてる」
私の釣り目がキラキラしてる？　私は照れ臭くなって眼鏡のツルを持ち上げて掛け直す。
「もう、それ外した方がいいのに」
「眼鏡が気に入ってるの」
私の答えに彼女はフーンと面白くなさそうに返事をする。
「で、今日のこの服は何の虫なんですか？」
「キアゲハ」
「キアゲハ？　蝶ですか？　あたし、蝶も苦手ぇ。だって、蝶の翅の粉が目に入ると失明するって言われませんでした？」
そんなの嘘よ、と言いかけた時、プァーンと警笛を鳴らしながら電車がホームに入り込んできた。私もアゲハも自然と黙った。
電車に乗り並んで吊革につかまると、すぐにアゲハはしゃべり出した。
「あれからナナちゃんは学童に行かず、ウチに来てるんです。母が、ナナちゃんのおばあちゃんのことね、学校が終わったら、校門まで迎えに行って、自宅へ連れて帰ってるんです、毎日。ナナちゃんは遊び相手がいなくてつまらないみたいだし、母は疲れちゃうし、サトコさんはそれでいいかもしれないけど、当人たちには全然いいことないです。早く学童に戻ってほしい」
私は小さな声で「頑張ります」と頭を下げる。ノビッコとしても休んでいる子供たちをそのまま放っておく訳にはいかない。指導員の増員を市へお願いしているし、外出時の注意事項を見直して、再策定しているし、それを子供たちへどう説明して実践してもらうか、保護者とどう関係性を作っていくか、など対応策をいろいろと考えているところである。
「カマキリさんを責めてる訳じゃないよ。だって、悪いのは勝手なことしたナナちゃんじゃん。散歩に連れて行った先生たちは責任を取って辞めるべきだ、なんて意見もあるみたいだけど」
そんな意見が出ているのも知っている。それで事が丸く収まるのであれば、最終的には飲まざるを得ないのかもしれない。
「でもさー、それなら逆に、勝手なことしたナナちゃんも責任を取って学童を辞めるべきってことでしょ、って言ったらサトコさんに

すごい顔してにらまれた」
アゲハは屈託なく笑う。その明るい表情に黒と黄色のブラウスが似合っていて、私は思わず彼女に見惚れた。
校内が急に騒がしくなり、私は我に返った。玄関の奥から子供たちの元気な声が聞こえてくる。靴を履き替えた子供たちが外へ出てくる。
「福田さんだ」
ノビッコの子供たちが私の方に寄って来る。皆、顔が輝いて見え、愛しく思う。
「福田さん」
菜波が大きな瞳を見開いて駆け寄ってくる。
「菜波ちゃん、元気そうだね」
私は彼女の頭に手を置く。帽子越しに子供の高い体温が感じられ安心する。
「早くノビッコに行きたい」
「そうだね。早く帰って来れるよう、私、頑張るね」
「福田さん、これ、どうしたの？」
恭太朗が駆け寄ってくる。久しぶりの挨拶もせぬまま、彼はしゃがみこみ私の足元に置いてある飼育ケースを覗き込む。
「キアゲハだ。羽化してる」
飼育ケースの中には枝に止まっている蝶が一匹。優しい黄色い翅に自然が創作した黒い網目模様。後ろ翅には黒縁の中に青い数個の点が並び一か所だけ赤く鮮やかに彩られている。
「今朝、ノビッコに来たらもう蝶になってたの。羽化したての翅を乾かしてるところだった」
「羽化してるところ、見たかったなぁ」「私も」子供たちが次々としゃべる。ノビッコの一、二年生はみんな集まっているようだった。ノビッコじゃない子供たちも周りに寄ってきている。
「この蝶、どうするの？　飼うの？」
恭太朗の言葉に、「私も飼いたい」と菜波が声を上げる。
「この蝶は外に放してあげようと思って。自由に空を飛んでほしい。皆で外の世界に送り出そう」
私はしゃがんで飼育ケースの蓋を開けると、蝶が止まっている枝をそっと掴み、枝ごとゆっくりとケースの外に出す。蝶は枝にしっかりとしがみついている。子供たちは固唾をのんで蝶を見守る。私は枝を持つ手をゆっくりと頭上に上げる。柔らかな風に蝶の羽が震えた。二、三回翅をまたたかせると、ふわりと空に浮き上がった。
黒と黄色のコントラストも鮮やかに。青空に浮かんだ蝶は軽く、けれど力強く羽ばたくと上の方へと舞い上がる。
子供たちは歓声を上げる。空へと高く手を伸ばす。跳び上がる。
その勢いを受け、蝶は青空を目指して飛んでいった。